

地方公務員 file

風を起こす

世界遺産になるんじゃない、
するんです！

群馬県企画部世界遺産推進課 地域連携係長

土屋 真志さん

「富岡製糸場と絹産業遺産群」をユネスコの世界遺産に登録しよう！―群馬県庁の土屋真志さんは、推進運動の旗振り役として奮闘する毎日だ。日本の近代化の礎を築いた産業遺産が世界遺産候補となったのは二年前の平成一九年。運動はこれからが正念場だ。「一〇年経ったら世の中の常識になっているような仕事ができたら本望」と、大きな夢に向かって走り続ける。

日本で「世界遺産」が注目されるようになったのは「平成」に入ってからで、まだ二〇年に満たない。昭和四七年（一九七二年）にユネスコ（国際連合教育科学文化機関）で採択された「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」に、日本が批准したのは平成四年（一九九二年）。翌年の平成五年に日本でも文化遺産として姫路城と法隆寺地域の仏教建造物、自然遺産として屋久島が世界遺産に登録されて、一気にブームに火がついた。

「世界の加盟国の中でも、世界遺産に対する日本人の関心は非常に高いですね」群馬県では平成一五年八月から世界遺産の運動をスタートしたが、土屋さんは「世界遺産」という言葉のブランド力の大きさを実感している。すでに多くのマスコミや企業から問い合わせや連携の話があるという。数年後に「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録されれば、テレビなどのメディアも頻繁に取り上げるようになり、観光客も飛躍的に増える。群馬のイメージアップや県経済への波及効

[つちやまさし]

昭和37年、群馬県宮城村（現前橋市）生まれ。宇都宮大学農学部を卒業後、昭和60年4月群馬県庁に入庁。蚕業指導員を10年間務めたあと、蚕糸課、流通園芸課、国際課、新政策課を経て現職。入庁以来、県庁スキークラブに所属し、初心者から始めて10年目にSAJ公認スキー指導員の資格を取る。現在は県庁つりクラブの副会長も務める。結婚は27歳の時。現在、娘は大学生で一人暮らし、妻と高校生の息子とともに実家で暮らす。





県民ボランティア「富岡製糸場世界遺産伝道師協会」との活動を共にすることも多い



アマゾンのエコツアーに参加し野生のワニ狩りを体験

果は計り知れないだけに運動に力が入る。

今回、土屋さんにインタビューしたのも、群馬県庁ではなく、東京・銀座だった。歌舞伎座に程近い晴海通りと昭和通りの交差点角に建つ「ぐんま情報総合センター・ぐんまちゃん家」で、県とともに世界遺産運動に取り組む県民ボランティア「富岡製糸場世界遺産伝道師協会」の人たちと一緒に世界遺産候補「富岡製糸場と絹産業遺産群」写真展を開催しているところを訪ねた。

「県民ボランティアの方々には、こうしたイベントなどで年間延べ一七〇日も活動していただいています」

群馬県だけでなく、日本全体に支援の輪を広げようと東奔西走している。

産業遺産に脚光 —近代工業国家ニッポンのルーツ

「よく『富岡製糸場は世界遺産になれるんですか?』と聞かれるのですが、なれるかどうかではなく、世界遺産にするか、しないかです」

現在、世界中で登録されている世界遺産は、文化遺産六八九件、自然遺産一七六件、複合遺産二五件を合わせて八九〇件（平成二二年七月現在）。うち日本国内では文化遺産二一件、自然遺産三件の計一四件が登録されている。

国内の文化遺産を見ると、姫路城、法隆寺のほか、古都京都の文化財（平成六

年登録）、白川郷・五箇山の合掌造り集落（七年）、原爆ドーム（八年）、厳島神社（同）、古都奈良の文化財（一〇年）、日光の社寺（一一年）、琉球王国のグスク及び関連遺産群（一二年）、紀伊山地の霊場と参詣道（一六年）、石見銀山遺跡とその文化的景観（一九年）があるが、明治維新以前の古い寺社仏閣が大半を占める。

以前は、群馬県でも富岡製糸場が世界遺産となる可能性があるとは、あまり認識していなかったようだ。しかし、ユネスコ世界遺産委員会が産業遺産について優先して登録する方針を打ち出したことで、その可能性が高まった。平成一五年、日本近代史に詳しい県職員の松浦利隆さん（現在は県世界遺産推進課長）が、その話を日本の産業技術史の権威である国立科学博物館の清水慶一氏から聞いて県幹部につないだことで、群馬県での研究プロジェクトが開始された。

「近代工業国家ニッポンのルーツをたどれば、必ず富岡製糸場と絹産業に行き着く。産業革命発祥地の英国でもアイアンブリッジ渓谷などの産業遺産を世界遺産に登録している。先進国はその証となる文化財を世界遺産にしています。アジアで最初の近代工業国家となった日本が、そのルーツである富岡製糸場を世界遺産にするのは当然でしょう。そう言っ、清水先生が後押ししてくれました」

群馬県では、一六年四月から松浦さんを中心に世界遺産推進室を立ち上げた。現在は世界遺産推進課となり、土屋さんもその係長として世界遺産運動に携わっている。

殖産興業を支えた工女—職業訓練の役割も果たした富岡製糸場

明治政府が近代国家をめざして富国強兵・殖産興業に取り組んだ時代、地下資源の乏しい日本の近代工業の発展に大きく寄与したのは絹産業であるのは間違いない。「学校の教科書でも必ず取り上げられていて、日本人なら誰もが知っているはずなのに、実際に富岡製糸場や絹産業遺産を見た人は少数だと思います」と土屋さんは残念がる。

背景には、映画『あゝ野麦峠』などで女工哀史の暗いイメージが絹産業に定着してしまっことが少なからず影響しているだろう。インタビューの時も、何気なく女工哀史の話題を口にすると、土屋さんは「絹産業の話をする、必ず出てくるんですよね」と苦笑しながら、製糸工場で働いていた「工女」について語り始めた。「あの時代、日本が欧米列強からの干渉を排除して独立を維持するために、男は兵隊、女は工女になり、誇りを持って日本を支えたのです。確かに『あゝ野麦峠』に書かれていたような悲しい出来事もあったようですが、九割方の工女は誇りと自



高崎市にある「群馬県立日本絹の里」では県内産の絹を使った製品も販売



ブラジルでは任務の一つとして子どもたちへの環境教育も行った

信を持って製糸場で働いていました。一等工女になれば家を建てられるほどの年収が得られたと言います。富岡製糸場で技術を習得した工女は、地元へ帰り日本各地の製糸場で製糸技術の指導者となりました。富岡製糸場は職業訓練学校の役割も果たしていたわけです」

現代社会の感覚で、明治からの製糸業を見ると、工女たちが劣悪な労働環境で働かされていたというイメージを持ってしまいがちだ。しかし、明治の工女たちの活躍があったからこそ、日本は工業国としての礎を築いたとも言えるだろう。女工哀史という言葉だけをとりえて、日本の近代化に多大な貢献をした絹産業の先人の英知と輝かしい歴史が歪められることがあつてはならないだろう。

養蚕農家の技術指導から始まった 公務員生活

「群馬県民なら誰もが知っている上毛カルタに、繭と生糸は日本一」と詠まれているほど、絹産業は群馬県を代表する産業でした。私自身も、もともとは養蚕が専門なので、思い入れが強すぎるのかもしれないませんが……」

土屋さんは群馬県宮城村（現前橋市）の養蚕農家の長男に生まれ、宇都宮大学農学部に進学、蚕に感染するウイルスの研究を専攻した。群馬県の養蚕業も最近では中国やブラジルなどに押され、最盛

期に比べて大幅に規模が縮小しているが、土屋さんが卒業した頃はまた群馬県庁には蚕糸関係技術職の採用枠が一人だけあった。土屋さんはその採用試験に合格して昭和六〇年に入庁、最初は養蚕農家の指導者として公務員生活をスタートした。

蚕の幼虫は、卵（蚕種）から孵化して四回脱皮して繭を作る。孵化から小さい頃までの幼虫（稚蚕）は病気にかかりやすい。六〇年当時の群馬県では、各地の農協が稚蚕を人工飼料で共同飼育するセンターを設置していた。土屋さんは、建設から飼育までの稚蚕人工飼料育センターの技術指導などを一〇年間、続けた。

「養蚕農家から預かった大事な蚕ですから責任は重大。センターに寝泊りして世話をすることも多く、大変でしたが、充実した毎日でした」

平成七年（一九九五年）、WTO（世界貿易機関）が設立されて農業の自由化がスタートした年に、土屋さんは蚕糸課に異動になった。この年に政府が生糸の生産調整を実施したことで、国内の製糸工場が次々に廃業した。この混乱で農家が生産した繭の売り先がない事態が発生した。そして土屋さんの実家も含め、養蚕業から撤退する農家が続出する危機的な状況となった。この事態を打開するため政府は、国産繭に補助金を導入する取引指導繭価制度を導入し、日本の養蚕業は一命を取り留めた。「あの時は、日本の

養蚕業がもう終わるのではないかと思いましたが」と当時を語る。

その後、土屋さんは、蚕糸絹業の振興の拠点「県立日本絹の里」の建設と運営を担当、異動した流通園芸課では「ぐんまフラワーパーク」の設立一〇周年事業や花の研究施設移転整備事業の二つの大きなプロジェクトなどを経験した。そんな中、平成一五年一月にブラジルのアマゾンで働くという海外赴任の話があり国際課に異動になった。

二年間のブラジル赴任—日本の歴史と文化の重要性を再認識

「地方自治体の職員が、海外で仕事するチャンスはあまりありません。ブラジルに二年間赴任する中で、逆に日本の歴史や文化の大切さも学びました。ブラジルから見る日本のイメージは最先端の工業国。その発祥地である富岡製糸場は、やはり世界遺産にしなければならぬと改めて思いました」

土屋さんにとって、平成一五年は慌しい一年となった。（独）国際協力機構（JICA）と連携した森林保全・環境教育プロジェクトの準備をしながら、世界遺産の研究プロジェクトの担当も兼務したのだ。

ブラジルに赴任した土屋さんの仕事場となったのは「アマゾン群馬の森」。ブラジルに群馬の森が誕生したきっかけは、平成四年にブラジルのリオデジャネイロで開催さ



工女姿のぐんまちゃんにチビっ子もご満悦。時には土屋さん自ら着ぐるみをかぶってPRすることも

空から見た富岡製糸場。建物の設計は横須賀製鉄所と同じフランス人のオーギュスト・バスチヤン



れた地球環境サミットだった。世界の首脳が一堂に集まる中で、日本の首相が欠席だったことを残念に思った在伯群馬県人会が、群馬県に働きかけて、アマゾンの森林保護のための募金を実施。その募金で平成八年に五四〇ヘクタールの森を購入して、アマゾン群馬の森は誕生した。

「なぜ、アマゾンで群馬県が環境保護活動を行うのか。その評価は極端に分かれますね。群馬県内の環境保護が先決と言う方もいます。ただ、平成二〇年にブラジル移民百周年を迎えたブラジルと日本の友好の歴史を振り返った時、ブラジルで日本人が環境保護に取り組む意味は大きいのではないのでしょうか」

土屋さんのブラジルでの仕事は、現地に適した環境教育や森林と共生する農業のプログラムなどをつくる事業全体のチーフアドバイザーだった。

「深く考えずに引き受けたのですが、赴任してみるとブラジルと日本の仕事のやり方や文化の違いにビックリ。赴任して約一年がたった頃には、腸に穴が開いて一五メートル切除する手術。断腸の思いとは言いますが、あまりの激痛に本気で日本に帰ろうと思いましたが」と、挫けそうになったことも。しかし、二人の子どもたちには負け犬の姿を見せたくないし、夏休みには子どもたちにアマゾンを見せるという約束を果たすため帰国を思いとどまった。しかし、その後も仕事の面ではブラジルと

の文化の違いでかなり悪戦苦闘した。

「約束を守らない多くのブラジル人を見ている中で、いかに日本人が生真面目で勤勉であるかを実感しましたね。また、ブラジルにおける契約社会のドライな面、人生も仕事も楽しもうというラテン的な面など日本人との違いを強く感じました」

多様な世界の歴史と文化。「富岡製糸場と絹産業遺産群」を世界遺産に登録するには、文化の異なる世界の人々に普遍的な価値を認めさせなければならぬ。土屋さんはそんな思いを強くして平成一八年一月に帰国し、世界遺産の仕事に戻るようになった。

今年からユネスコへの推薦書作成に本格着手

平成二〇年七月に開催されたユネスコの世界遺産委員会では、平成一三年に世界遺産候補となっていた「平泉―浄土思想を基調とする文化的景観」の登録が見送りとなった。メディアでも、世界遺産の審査が厳しくなっていることが大きく報道された。

「群馬県も、今年からユネスコに提出する推薦書の作成に取り掛かったところで、これからが正念場だと思っています。私の担当する係は、運動を盛り上げる旗振り役です。頑張りますよ」

世界遺産登録の可否を決めるユネスコの世界遺産委員会は、毎年七月頃に開催

される。そこで暫定リストの中から推薦書が提出された案件を審議し、登録の可否を決定している。国は平成二三年の世界遺産委員会に、平泉の推薦書を再提出する予定だが、暫定リスト入りから数えて一〇年がかりの挑戦となる。

群馬県の世界遺産への挑戦も、平成一五年から数えて一〇年くらいはかかるかもしれない。「公務員として一〇年経ったら世の中の常識になっっているような仕事をしたい。この世界遺産登録を見届けたら」との土屋さん言葉にも、その覚悟が滲む。

最後に、将来の夢を聞いた。

「遊ぶように仕事するブラジル人をまねて楽しく生きていきたいですね。家は農家ですから退職したら定年帰農です。楽しい農業の新しい形をつくりたいと考えています。消費者と夢を語り合う直販農業をやろう！と思っています。絹の世界遺産の応援しながら養蚕もやりますかね」と笑う。

(取材・執筆／ジャーナリスト・千葉利宏)



千葉 利宏

[ちば としひろ] 昭和33年(1958年)生まれ。札幌市出身。東京理科大学建築学科卒、日本工業新聞社(フジサンケイ・ビジネスアイ)入社。経済記者としてIT産業、金融業、自動車産業、住宅・不動産業などを取材。平成13年(2001年)からフリーで経済ジャーナリストとして活動。日本不動産ジャーナリスト会議幹事。